

| | |
|--------------|---|
| Title | 動詞・連用形の性質 |
| Author(s) | 澤西, 稔子 |
| Citation | 日本語・日本文化. 29 P.47-P.66 |
| Issue Date | 2003-03 |
| Text Version | publisher |
| URL | https://doi.org/10.18910/11493 |
| DOI | 10.18910/11493 |
| rights | 本文データはCiNiiから複製したものである |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究論文>

動詞・連用形の性質

澤西 稔子

1. はじめに

例えば誰かがある状況下で窓の外を見ながら「今日は雨が降りそうだね。」と言った場合、母語話者は伝聞が様態か一瞬に判断する。その判断根拠は、その状況によるところももちろんであるが、「降り」「降る」の連用形か基本形かの活用語尾の差異であり、つまり連用形、あるいは連用形の活用語尾と言ってもいいかもしれないが、そこから何らかの判断材料を得ているということになる。それは何か？

連用形については、三上（1963）は語幹を二つ立て ik の iki、it の itte、ittari を中立形とし、「中立法自身はテンスもムードも示さない。それは後続の動詞次第である。たとえば、後続の動詞が命令法なら、中立法もそれに逆応りして命令の意味になる。」としている。寺村（1982）も連用形、並びにテ形、タリ形のムードを一次的形式の「保留系」と名付け「ムードを保留し、後の文のムードにゆだねるもの」「あとの文（主節）がムードを表わすまで態度を保留するムード」とし、連用形のムードに関係のない用法として、歩きます、歩きながら、歩きかた、お歩きになる、そして連用形の名詞化用法を挙げている。

このように連用形は、「行く」「行け」といった明確な「確言」「命令・要求」ムードを表わす動詞の基本形、命令形などと同様に、それ単独での使用法があるにもかかわらず、積極的な意味でのムードを担っていないというのが一般的な認識であり、日本語教育の現場でも文法項目導入の際に、ただマス形語幹として導入されているだけで終わっているのではないだろうか。

そこで、現在使われている動詞の連用形の用法は次のように整理できるが

i. 前文を後続の文に接続する際の接続用法

- ii. 連用形がそれ単独で、名詞として使われる名詞化用法
- iii. 複合動詞の前項として使われる用法
- iv. 「～つつ」「～ながら」「～そうだ（様態）」などの文法事項の構成要素としての用法

ここでは、これらの中でも特に連用形単独使用の i、ii の用法を中心に考察し、連用形が本来どのような性質を持ったものであるのかを明らかにしていきたいと思う。

また活用形・活用語尾については以下の寺村（1984）の考察を基に考えていきたいと思う。

- (i) 書ク、書キ、書ケ（命令形）など、動詞の活用した形は、それぞれ、語幹（stem）と活用語尾（Inflection）という二つの形態素から成る一語であり、相互には別の語である。
- (ii) 語幹は、その用言の語彙的辞書的意味を表わす実質形態素であり、活用語尾は、その語幹を中心とし、それに補語が結びついて描かれる概念的、抽象的なコト（渡辺文法の叙述内容）を、話し手が具体的、現実的な発話としてもち出す、その持ち出し方（ムード）を表わす機能形態素である。機能形態素である活用語尾の表わす意味は、（語彙的意味に対する）描叙類型的意味である。渡辺文法でいう、用言の概念を表わす素材表示の職能と、（それに先立つ補語などを）総合して叙述内容を形成する統叙の職能は、語幹に託され、断定や命令を表わす陳述の職能は、活用語尾に託される。

2. 接続用法からみる連用形

2.1 連用形とテ形による接続用法

連用形、テ形接続用法については、生越（1988）、仁田（1995）、田代（2002）等、既に多くの先行研究がなされているが、連用形接続とテ形接続の違いにおける一般的な認識は、次の益岡（1992）の分析のようにまとめることが出来るであろう。

- ① 文体の面で比較すると、連用形並列の方がより文語的であり、テ形並列の

方がより口語的である。

- ② 並列の文法的性格においては、連用形並列の方が典型的な並列表現である。動的事態の並列表現においては、テ形並列の方が時間的前後関係（継続関係）の意味が出やすい。
- ③ テ形は、並列関係を表現する用法に加えて、述語を修飾する用法、すなわち副詞節を作る用法を持つ。副詞節として働く場合、具体的には、原因、手段、付帯状況、等を表す。

2 では、この考察をもとに接続用法における連用形の性質について考えていきたいと思う。

2.2 連用形接続の中心的用法

まず益岡の②の連用形接続の方が典型的な並列であるという点であるが、奥田(1989)や言語学研究会のメンバーによる研究でも、連用形を<第一なかどめ>、テ形を<第二なかどめ>と呼び、「第二なかどめはふたつの動作・状態のあいだの複合的な従属の関係を表現していて、それを土台にして、さまざまな意味的な関係をも表現するようになっているが、第一なかどめのほうは並列の関係を表現する」といった同様の考察がなされ、又田代(2002)でも「並列については、連用形中止形接続が多く使用される。特に、同様な内容を並列する場合や対比的な内容を並列する場合、テ形接続より、連用形中止形接続がより適切である。」と結論付けられている。

中野(1997)はテ形接続と連用形接続法の差異を明らかにするために、付帯状態・時間的継起・起因的継起・並列²⁾の用法を更に細分化した連用形接続とテ形接続の2例文ずつの18組を、母語話者の日本人学生353人、日本語学習歴1~3年の香港・韓国留学生90人に呈示、連用形接続、テ形のどちらを支持するかというアンケート調査を実施している。

その「継起」に関する項目では、日本人学生の場合、テ形支持あるいは連用形支持については大きな差は出ていないが、「並列」用法を見ていくと

- { (1) 彼は泥の付いた靴を履いて、穴の開いたズボンを履いていた。…22.9%
(2) 彼は泥の付いた靴を履き、穴の開いたズボンを履いていた。…70.5%

- { (3) 母は私のために、熱を下げて咳を止める薬を買ってきてくれた。…22.6%
 { (4) 母は私のために、熱を下げ咳を止める薬を買ってきてくれた。…70.5%

のどちらの場合も、(2)(4)の連用形接続のほうが支持率が高く、並列の場合、連用形接続の方が母語話者にはより自然に感じられるという結果が出ている。

いずれにしてもここで取りあげている連用形接続の場合、その中心となる用法は次のような「並列」、そして「継起」であるという点をまず再確認しておきたい。

- (5) それまでの一年有余、応召以来、朝から晩までどなられ、たたかれ、追いまくられてきた果てに、こんな静かな台風の目のような生活が、ポカッと私の目の前に立ち現われた。
 (梅崎春生「眼鏡の話」)
- (6) 木が分解して栄養分を森に与え、キノコを育て、それを食べる虫、その虫を食べる鳥やネズミを育てる。(開高健「ムダこそ自分を豊穡にする」)
- (7) 入ってきたのは色の黒い、やせた先生で、八字ひげを生やし、眼鏡をかけ、大小さまざまな書物を山のように抱えていた。(魯迅「藤野先生」)
- (8) ふんどし一つで家じゅうを歩き回り、大酒を飲み、かんしゃくを起こして母や子供たちに手を上げる父の姿はどこにもなく、威厳と愛情にあふれた非の打ちどころのない父親がそこにあった。
 (向田邦子「字のないはがき」)
- (9) 彼は一本の巻き煙草に火をつけ、静かに市場の中に進んで行った。
 (芥川龍之介「或る阿呆の一生」)
- (10) 八月、鎌倉に至り、頼朝に謁し、引き止められるものきかず、贈られた銀作りの猫を門外の嬰兒に与えて去った。
 (小林秀雄「西行」)

2.3 付帯状況から考える連用形

次に益岡の③にその他のテ形接続の用法として挙げられている用法について連用形接続の場合はどうかみていきたい。

i) 付帯状況

- (11) 花子さんは手をたたいて喜んだ。
 花子さんは手をたたき、喜んだ。 …×
- (12) 手をあげて道路を渡った。

- 手をあげ、道路を渡った。 …△
- (13) 口笛を吹いて本を整理した。
口笛を吹き、本を整理した。 …△
- (14) 暑かったので、窓を開けて寝ました。
窓を開け、寝ました。 …×

ii) 原因

- (15) 雨が降って、試合が中止になった。
雨が降り、試合が中止になった。 …○

iii) 手段・方法

- (16) 牛乳パックを使っておもちゃを作った。
牛乳パックを使いおもちゃを作った。 …○
- (17) 動物を使って、実験する。
動物を使い、実験する。 …○

この i) ~ iii) のうち、i) の付帯状況の場合、連用形接続は多少無理があると言える。

この付帯状況については、田代 (2002) は「付帯状態については、連用形中止形接続は、説明的文章でもほとんど使われず、テ形接続が使われる」としている。又仁田 (1995) はシテ形接続の<付帯状態>を表す下位タイプを<し手容態><心的状態><し手動作><附属状況>と分類し、中野 (1997) のその分類に基づいた調査では次のような結果になっている。

<し手容態>

- | | |
|-------------------------|--------|
| { (18) 私は大の字になって寝てしまった。 | …74.5% |
| { (19) 私は大の字になり寝てしまった。 | …16.7% |
| { (20) 彼女は目を開いて眠っている。 | …83.2% |
| { (21) 彼女は目を開き眠っている。 | …11.3% |

<心的状態>

- | | |
|---------------------------------|--------|
| { (22) 酒好きの佐山は安心して、ウイスキーを飲みました。 | …64.5% |
| { (23) 酒好きの佐山は安心して、ウイスキーを飲みました。 | …19.8% |

<し手動作>

- { (24) 手をたたいて選手団を迎えましょう。 …85.5%
 { (25) 手をたたき選手団を迎えましょう。 …10.1%

<附属状況>

- { (26) 隣合って、一つの車内に身を置いていても話をしないことがある。 …63.1%
 { (27) 隣合い、一つの車内に身を置いていても話をしないことがある。…26.6%

この<付帯状態>の分類の中では、特に、<し手容態><し手動作>に関しては圧倒的にテ形接続が支持されている。

付帯状況というのは前文の動詞の結果・状態を維持して、後続文の動詞の、動作をする・状態になる、ということであるから、前文(従属節)の後続文(主節)に対する拘束力は当然強くなる。つまりテ形接続の方が、主節に対する従属節の従属度は高く、連用形接続の方が従属度が低いということである。この仁田分類<付帯状態>の中野の調査でも、<し手容態><心的状態><し手動作><附属状況>の中で、<心的状態><附属状況>よりも、内容から判断して、後続文に対し、より拘束力の強い<し手容態><し手動作>のほうがテ形支持率が高いという結果にもそのことは表れている。

2.4 三上(1963)の「句切りの力」から考える連用形

この「テ形接続の方が、主節に対する従属節の従属度は高く、連用形接続の方が従属度が低い」と同様のことを三上は「句切りの力」という表現を使い、次のように述べている。

中立法の句切りの力は一般に小さいという予想であるが、中立法どうしの間では次のような傾向が認められる。

シテ形<シ形

継起的<併存的

完結的<状态的

三つの不等式は互いに無関係なものではない。左辺どうし、右辺どうしが相関的なのである。

シテ形とシ形をでたらめに並べてみる。

～シテ～シ～シ～シテ～シテ～シ～シタ。

この場合には、次の一番目のような連合が最も起りやすく、二番目が最も起りにくい。

(～シテ～シ) (～シ) (～シテ～シテ～シ) (～シタ)

(～シテ) (～シ～シ～シテ) (～シテ) (～シ～シタ)

デアリにせよ、ガアリにせよ、ari は状態動詞のシ形である。意味ももちろん併存を表す。だから ari の句切りは最も大きい。中立法の句切りは一般に小さい、という私の予想を裏切る程度である。

三上の「中止法どうしの間では句切りの力はテ形より連用形のほうが大きい」との指摘であるが、その根拠は三上の直感によるものかとも思われ、ここでもう一度検証しておきたい。

新川 (1990) には一つの文の中に第一なかどめ (連用形接続) と第二なかどめ (テ形接続) が共存している場合のパターンでまとまってあらわれてくるものとして、次の3つのパターンが挙げられている。

《第一なかどめ》+《第二なかどめ》+《定形動詞》

《第二なかどめ》+《第一なかどめ》+《定形動詞》

《第二なかどめ》+《第一なかどめ》+《第二なかどめ》+《定形動詞》

以下はその新川 (1990) 所収の例文であるが

- (28) 僕は会社へ長距離電話をかけ工場長から長期欠勤の許可をえて入院した。
- (29) 初之輔はしかたなく家へもどり鍵をかけて二階へ上がった。
- (30) 僕は自分で三里に灸をすえ足の先が痛いのをがまんしてたちあがった。
- (31) 焼跡からやかんや空瓶など手あたりしだいに集めて水を入れ水にうえてある被爆者に配給して回った。
- (32) 重松は用意しておいた弁当と懐中電灯を持って養魚池へ出かけ庄吉さんや浅二郎さんと産卵池の水温の調節をした。
- (33) タオルを水でひたしてきて患部をそっとふき交換用の布をおおってばんそうこうでとめた。

この例文を使い「これらの例文を途中1箇所だけで句切るとすれば、どこで切

るのが適当か」という調査を母語話者 60 人に実施したところ、各文とも「連用形の後ろで句切る」というのが圧倒的で、平均 92% という結果が出た。やはり三上の指摘するように、「句切りの力」は潜在的に連用形の方が強いということであろう³⁾。この「句切りの力」が強いということと、連用形接続の主節に対する従属度の低さは同じことを意味していると思われる。

2.5 三上 (1963) の「ムードの独走」から考える連用形

又三上 (1963) は、上述の、より併存的・状態的であるシ形のほうがシテ形より、句切りの力が強いという記述に関連して、「句切りが大きくなるにつれて、逆応も鈍るという傾向がある」「あとのムードが独走するのはシテ形に少なく、シ形に多い。特に *ari* に多い」とし、次のような例文を挙げている。

- (34) 一方的な退職、退学処分は人権侵害のおそれが *ari*、今後このような処分をしないよう十分注意されたい。
- (35) 現在われわれが日常使っている文字は千数百年来祖先によってはぐまれてきた文化遺産で *ari*、こんな理由から国字の改革を企てることは正に“角をためて牛を殺す”に等しい暴挙ではあるまいか。

もっとも三上は連用形接続のこのような *ari* の振るまいを文法違反ととらえており、三上の言葉では「あとのムードが独走する」となるのであるが、この用法は田代 (2002) の「独立性の高い用法」にも関連したものと思われる。三上が「あとのムードを重んじたければ、人権侵害のオソレガ *aru* カラとしたり、文化遺産デ *aru* で文を一ぺん切ったりすればなんでもないのである。」と述べているように、互いに関連性のある独立した文が、書き手の思考・判断過程の中で、ただ単に接続されていると言えるこの用法は、筆者の意見等が述べられる場面、評論等に多く出現する傾向が見られる。

- (36) この人の歌の新しさは、人間の新しさからじかに来るのであり、特に表現の新味を考案するというふうな心労は、ほとんど彼の知らなかったところではあるまいか。
(小林秀雄「西行」)
- (37) 現在の国際社会の構造あるいは観念は、近世接続絶対主義国家の時代から十九世紀いっぱいかかって形成された西ヨーロッパの主権国家間のシ

システムを、ただ世界的に適用したものであり、国際連盟も国際連合も、
 そういう由来を持っております。(丸山真男「幕末における視座の変革」)
 いずれにしても三上の指摘するようなタイプの連用形接続は、後続文に対
 して、自立的で独立性が高いと言えるであろう。そしてこのような連用形接続
 の振る舞いは、ある意味、便利な接続法であるとも言え、次の章で考察していく、
 「連用形接続が新聞、論文等で多用される」ということにつながっていく側面も
 持っていると思われる。

2.6 連用形接続法からみる連用形の性格

以上連用形接続法から、連用形接続の

- ①並列的
- ②従属度が低い一句切りの力が大きい
- ③独立的である一後のムードの独走

という特徴が改めて浮き彫りになってきた。これらの特徴を見ていくと、それぞ
 れが相関的であるのは明らかであり、連用形接続の特徴を一言でいえば、《並列
 的》ということになる。

本来《並列》というのは

(38) 人々の心、山、川、谷…

というように、それぞれの語のイメージを次々と言語活動者の脳裏に喚起させ、
 そしてそのイメージを後続文(後続語)につなげていくということである。名詞
 に限らず、《並列的》な特徴を持つ接続法として使われる動詞の連用形の場合も、
 その本質は動詞の持つイメージを喚起することであり、それをそのまま後続文に
 つなげていくということではないだろうか。

そこで次に益岡の

- ① 文体の面で比較すると、連用形並列の方がより文語的であり、テ形並列の
 方がより口語的である。

を基に新聞、文学作品といったジャンル別における連用形接続法という角度から、
 連用形の本質というものを探っていきたい。

3. ジャンル別の接続用法からみる連用形

3.1 新聞紙面の連用形接続法

連用形接続の一般的な認識は「日本語教育では初級でテ形が導入されるが、テ形は話し言葉的であるため、書き言葉においてテ形を多用すると稚拙な印象を与える（林 2002）」といったものに代表されるであろう。

実際新聞の場合、連用形接続、テ形接続どちらでも使用可能な場面での、その使われ方の割合を調べてみるに、連用形接続はおよそ 85%になる⁴⁾。

このことは言語の経済性という点からとらえることができる。新聞では限られた紙面上、出来事を客観的に、簡潔に、冷静に、わかりやすく読者に伝えるというのが第一義であり、そのため言語の経済性を考えることは不可避であり、もし動詞+助詞という構造のテ形接続の代わりに、同様の事柄が動詞の連用形のみで事足りるならば、そして接続法において 2.5 で見たように、テ形接続とほぼ同様の働きをするが、テ形接続に比べ、後続の文を拘束せず、書き手の自由な展開を許す便利な接続法であることが新聞紙面にとって効率的であるのは自明のことである。

このことは新聞だけでなく、字数の制限ということが前提としてついて回る論文⁵⁾・解説文等でも同様であろう。限られた紙面でできるだけ多くの情報を満載させるためには自ずと言葉の経済性が要求される。このことが連用形接続に対する「シテ形の過剰般化は稚拙さを感じさせることが少なくない。（中野 1997）」といった印象を助長し、更には一般的に連用形接続の使用がテ形接続に比べ、文語的で、客観的であり、簡潔であるという印象を生み出してきたと言えるのではないか。

しかしこれは連用形接続の二次的、派生的な側面だと言える。なぜなら文学作品においてはその限りではなく、事情が異なってくるからである。

3.2 文学作品の中での連用形接続法

たとえば連用形接続が多用されている文学作品の一つの例として太宰治の『走れメロス』を取り上げてみたい。この作品はその内容と相俟って連用形が多用されることで独特の世界が構築されている。

- (39) 村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村についたころには雨もやみ日が高く昇って、そろそろ暑くなってきた。
- (40) 波は波をのみ、巻き、あおりたて、そうして、ときは刻一刻と消えていく。
- (41) 道行く人を押しのけ、はね飛ばし、メロスは黒い風のように走った。
- (42) 野原で酒宴の、その酒宴のまっただ中を駆け抜け、酒宴の人々を仰天させ、犬をけ飛ばし、小川を飛び越え、少しずつ沈んでいく太陽の、十倍も速く走った。
- (43) 二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

連用形接続の多様で、時間に制約されたメロスの行動が簡潔に、メロスの抱える緊迫した状況がより躍動感を持って描かれていると言える。

しかしこのようなその場の緊迫感、躍動感を描写する際に連用形接続が必ずしも必要かという点、文学作品の場合そうとも言えない。『走れメロス』とは対照的に、芥川の作品『羅生門』では接続法として連用形は全く使われていない。プロットの緩急自在な展開にもかかわらず、テ形接続ですべてが描ききられ、それでも老婆と下人との緊迫した場面描写は十二分に達成できている。このことは連用形をあえて使用しなくても、他のレトリックを駆使することで、場面の緊迫感等の描写は十分可能であることをも証明している。

- (44) そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大またに老婆の前に歩み寄った。老婆が驚いたのはいうまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こうののしった。老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。

そして興味深いことにこの作品の中で連用形が使われているのは次の一例のみ

である⁶⁾。

- (45) そのとき、そののどから、鴉が鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の
耳に伝わってきた。

ここでの連用形の職能は様態の副詞とほぼ同様であり、「あえいで」と言い換えることはできない連用形独自の副詞的用法である。「あえぐ」の連用形「あえぎ」を重複することでその場の老婆の様子、声の調子が、読み手に生き生きと伝わり、擬音語相当にあるいはそれ以上にその場面が読者にイメージ化できるという効果が生じると思われる⁷⁾。

この連用形の用法は、韻文の中での、いわゆる「連用止め」にもつながっている。あえて終止形で終わらず、連用形で終えるというレトリックは連用形の持つ性質を理解した上で、効果的に利用されたものと言える。次の詩の場合も連用形で終止することによって、あるいは効果的に使うことによって、その動詞の持つイメージが、その情景と相俟って読者の中に喚起され、その情景を生き生きと連想することができる。

- (46) ますぐなるもの地面に生え、
すどき青きもの地面に生え、
凍れる冬をつらぬきて、
そのみどり葉光る朝の空路に、
なみだたれ、
なみだをたれ、
いまはや懺悔をはれる肩の上より、
けぶれる竹の根はひろごり、
すどき青きもの地面に生え。 (萩原朔太郎「竹」)
- (47) 月夜の晩に、拾ったボタンは
指先に沁み、心に沁みた。 (中原中也「月夜の浜辺」)

3.3 ジャンル別の連用形接続法からみる連用形の性質

以上見てきたように新聞等で連用形が多用されることからの「テ形接続の多用は稚拙な印象を与える」というのは連用形の本質からの認識ではないように思わ

れる。連用形の本質はむしろ (45) (46) (47) 註7) などの用法にあり、これらの用法から見られる連用形の性質は、2 で考察した連用形接続の並列的な特徴から考えられる性質と重なるものであり、つまりそれは、動詞の持つイメージを言語活動者の脳裏に喚起させるということではないだろうか。

そして書き手なり話し手がその連用形接続の潜在的な性質を強く意識し、言語活動に反映させた時に、その情景をイメージ化させたいという書き手、話し手のムードを連用形は積極的に担っていくことになると思われる。そしてこのような連用形の性質・特徴が、次で見ていく連用形が名詞に転用されやすいということにつながっていると思われる。

4. 連用形の名詞化用法からみる連用形

4.1 転用名詞の語構成

動詞の連用形は、「休み・踊り・つながり」といったように連用形単独の形で名詞に転用される。

その転用名詞の主な語構成は

- ①連用形単独のもの…住まい・生まれ・育ち・争い・考え等
 - ②連用形+連用形…組み立て・やり直し・割り引き等
 - ③名詞+連用形…人通り・昼休み・びん詰め等
 - ④連用形+名詞…飲み物・売り場・話し声・買い物等
 - ⑤副詞+名詞…ぐい飲み・ヨチヨチ歩き・ばら売り等
- となる。次にそれぞれの特徴を大まかに見ていきたい。

4.2 連用形単独での転用名詞

『日本語教育のための基本語彙調査』・用の類(動詞)を調査してみると1138語中431語、約38%の動詞の連用形が名詞への転用可能であり、この数字は動詞のイメージをもとに名詞化が容易に可能なことを示している。

| | | | |
|--------|--------|--------|---------|
| 問い⇔質問 | 争い⇔紛争 | 訴え⇔要求 | 頼み⇔依頼 |
| 務め⇔勤務 | 誤り⇔失敗 | 真似⇔模倣 | 願い⇔願望 |
| 親しみ⇔好意 | 憎しみ⇔憎悪 | 知らせ⇔通知 | 付き合い⇔交際 |

泊まり⇔宿泊 間違い⇔失敗 見込み⇔予想 うぬぼれ⇔自慢

実際日常生活レベルでは上記のような、対応する漢語があるにもかかわらず、連用形の転用名詞が多く使われていると言える。このことは動詞の連用形が日常会話レベルでは名詞転用の有標として働いており、日常の談話レベルの接続用法としては、テ形接続が用いられ、連用形接続はほとんど用いられないという事実と表裏をなしていると思われる。

そして『日本語教育のための基本語彙調査』の中の用の類（動詞）でも特に「精神および行為」の「応接・約束・交渉・対人感情・志望・反省・思考・認識・知解」に分類された動詞の連用形に、以下のような名詞に転用できるものが数多く見られる。

苦しみ・悲しみ・喜び・憎しみ

恐れ・怒り・憧れ・恨み・感じ・悩み・親しみ

叫び・笑い・痛み・仕返し・おだて・だまし・いじめ・あざけり

特に「喜ぶ」「悲しむ」といった感情を表わす動詞の場合は、感情直接表出の形容詞と比べると

(48) うれしかった→成功を喜んだ

(49) 悲しかった→父の死を悲しんだ

のように「より客観的、物語的」になることが寺村（1982）により指摘されている。そしてさらに転用名詞はどうかというと

(50) あの時の喜び／悲しみは忘れることができない。

のように、個別な事例に対応している動詞に比べると、より客観化、抽象化の進んだ描写になっていると言えるだろう。

又自他の対応がある動詞でどちらか一方のみが名詞化している場合、9割以上の確率で自動詞のほうに名詞化が起っている。

| | | |
|---------------|----------------|----------------|
| { 残る→残り 残す | { 続く→続き 続ける | { 動く→動き 動かす |
| | | |

このことは自動詞、つまり現象や事物が自然に変化していく様のほうがイメージ化、抽象化しやすいということであり、動詞から名詞への転用がスムーズに起こるといふことだと思われる。

4.3 名詞と連用形の組み合わせで名詞化しているもの

『日本語教育のための基本語彙調査』・体の類の中の連用形からの転用名詞を見ていくと、特に具象名詞の場合、本来の動詞の意味を意識化できないほど名詞化してしまっているものも数多い。

手洗い・湯のみ・缶詰・手ぬぐい・飲み水・贈り物・編物
持ち物・忘れ物・落とし物・売り物・履物・消しゴム

このことに関連して

食べもの⇔食べるもの 飲むもの⇔飲みもの

の対応について考えていきたい。寺村(1991)は、「動詞が、コトを束ねる述語としての機能をまったく持たず、もっぱらその語彙的な意味であるとの名詞を限定・修飾する(特徴付ける)ために使われる例としては次のような例があげられるだろう。」とし「食べるものが何もない」の例文を挙げている。しかし

(51) なんか食べるものない?

の「食べるもの」は、「私が今食べるものは何かないのか」という意味での、その場の状況での一回的で、個別的な対応としての使われ方の「食べるもの」であり、「食べもの」というと、より一般的な概念に昇華したものを指していると言えるだろう。南(1993)も文の構造を、描叙・判断・提出・表出の4段階からなる階層的性格からなるものにとらえていく中で、その描叙段階以前の、より非限定的な言語事実として、雨降り、泡立ち、絵描き、種まき、川遊び、昼寝、五時起きといった複合名詞類を挙げ、これらの複合語を構成しているひとつひとつの要素は一般的なものごとを表して、特定のものごとを表していないという特徴があるとしている。

4.4 連用形と連用形の組み合わせで名詞化しているもの

『日本語教育のための基本語彙調査』・体の類の中の複合動詞の連用形が名詞化しているものを見ていくと、

書き取り・組み立て・やり直す

といった語彙的レベルで結びついているものや

落ち着き・打ち合わせ・引き分け・取り締まり

のような複合動詞というより一語として認識したほうがよいものが大半(約90%)である。

～はじめ・～だし・～かけ・～つづけ・～つづき・～おわり・～おえ・～やみ⁸⁾といったアスペクト的なものは見られない。

又複合動詞にはない組み合わせとして

出入り・乗り降り

といった転用名詞独自のものもある。この造語が容易であるということも、連用形転用名詞全般の特徴としてあげられ、「アメリカ帰り」「五時起き」「一時預かり」、副詞との組み合わせの「ヨチヨチ歩き」等を見ていくと、造語力の旺盛さが感じられる。この動詞の連用形からの造語に関しては、それぞれの地域共同体、各種業界等で独自に造語され使用されている例も数多い⁹⁾。

4.5 名詞化用法からみる連用形の性格

つまりこの名詞化用法は動詞の連用形が転用名詞となる時点で、個別の状況に対応して使われる動詞の持つ意味、内容が、より概念化・一般化・抽象化という処理を施された上で名詞として使われていると言えるであろう。

名詞化された「連用形」という形は、寺村の指摘のように語幹部分はその素材概念を表わしているが、活用語尾を含めた連用形全体には、その動詞の持っている概念を、より一般化、抽象化した形で我々の脳裏にイメージ化・映像化させるという働きが根本にあるのではないか。

このように転用名詞の性質をとらえていくと、次の例文のような本来なら名詞が来る位置に動詞の連用形が来るような場合、動詞連用形の転用名詞と同様の機能を持つもの（実際には転用名詞としては使われていなくても）が来るととらえていくと日本語教育の現場でも説明しやすくなると思われる¹⁰⁾。

(52) 泳ぎに行ってくる、走りに行ってくる。

(53) 行きはする 書きもする

(54) 犬はもう息をはあはあし、赤い舌を出しながら走っては止まり走っては止まりしていた。

5. まとめ

以上連用形の接続法、転用名詞を中心に、連用形の持つ本質的な性質というのは何かということを考えてきた。

連用形の根本的な性質というのは、『「その語幹と先行する補語や修飾語によって表されるコト（叙述内容）（寺村 1984）」を、つまり、本来個別なシーンで使われる動詞の、語幹部分が持つ動的イメージを、概念化・一般化し、それを話し手、書き手、聞き手等、その場の言語活動に携わる人間の脳裏に、イメージ化・映像化する』ということだと思われる。放たれた動詞のイメージが広がり、それが完結するかしないかは言語活動者には直接関係はない、客観的に映像化されやすいイメージの広がりを描く、それがこの連形の持つ根本的な特徴、性質ではないだろうか。

そしてムード的な機能は多くの場合、潜在的で、日常的にはほとんど意識されることなく使用されており、例えば韻文のように、そのイメージの広がりを読者に呈示したいという積極的な意図が話し手、書き手に働いた時、顕在化したムードを担うことになるとと思われる。

註

- 1) 三上 (1963) に「順応のことを逆応と言おう」とある。
- 2) ここでの中野の分類は、仁田 (1995) 分類に順じて行われている。
- 3) 高校生から 60 代までの母語話者（職種を問わず）を対象に実施。
被験者から「各文のちょうど真ん中辺りで、切れるのでは」という意見があったが、このことは作者が文のバランスとして、文の句切れを無意識にその真ん中辺りにおいて書いており、そこに連用形が使われているとも推測できる。
- 4) 毎日新聞・2002 年 10 月 4 日朝刊・日本経済新聞 2002 年 6 月 29 日夕刊で調査。
- 5) 論文集「日本語教育」111 号所収の研究論文・調査報告・実践報告 7 編の場合、連用形接続の割合の平均は約 82% である。
- 6) この「あえぎあえぎ」は
まず私たちの通信車は K 基地を出発して、山道をあえぎあえぎ数時間走り、坊津を眼下に見下ろす峠に着いた。
(『眼鏡の話』梅崎春生)
にも見られ慣用的な側面もあるのかもしれない。

- 7) この論文では古典の領域までは調査できなかったが、例えば『伊勢物語』では接続法として連用形が使われることはなく、連用形の用法としては次のものが見られただけであった。

< 9 段 >

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。

< 23 段 >

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき
などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

< 56 段 >

むかし、男、ふして思ひおきて思ひ、思ひあまりて、

このよう使い方も連用形の本質を見ることが出来る用例であると思われる。動詞連用形を繰り返すことより、情景のイメージ化がより強化される。このような表現は現代の次のような表現にも通じるところがある。

・ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠を登り、登りきって、ほっとしたとき、突然目の前に一隊の山賊が踊り出た。 (太宰治「走れメロス」)

又次のような用法も連用形独自のものである。

・彼が飯屋の前に立ち尽くしていた時に少女は時々悪意を含んだ険しい目つきを彼の方へ向けていたが、しまいには男と代わる代わる酌をしていた女に何かこっちを見い見い告げ口をした。 (志賀直哉「真鶴」)

・彼はまた、不意に道傍からその女の立ち上がって来ることを繰り返し繰り返し想像した。 (志賀直哉「真鶴」)

- 8) 一般的にはアスペクト的複合動詞からの転用名詞としては「～かけ」「～だし」が比較的生産性が高いと言えるが、他の転用名詞はあまり使用されない。
- 9) 道つくり・やりもらい・つつつき・利食い売り等
- 10) 三上 (1963) はこれらの用法を中立形の語幹用法としている。

参考文献

- 生越直樹 (1988) 「連用形とテ形について」『横浜国大言語研究』6
- 岩波悦太郎編著 (1960) 『悪文』日本評論新社
- 奥田靖男 (1989) 「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」『ことばの科学2』むぎ書房
- 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- 言語学研究会・構文論グループ (1989) 「なかどめ——動詞の第一なかどめのばあい——」

『ことばの科学3』むぎ書房

白川博之 (1990) 「独立性の高いテ形・連用形について」『広島大学教育学部紀要』第2部
第38号

田代ひとみ (2002) 「連用形中止形についての一分析」『東京大学留学生センター紀要』1

寺村秀雄 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

_____ (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版

_____ (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版

中野はるみ (1997) 「シテ形接続と連用形接続の使用の実際」『留学生教育』

新川 忠 (1990) 「なかどめ——動詞の第一なかどめと第二なかどめの共存のばあい——」

『ことばの科学4』むぎ書房

仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐる」『複文の研究』上 くろしお出版

波多野完治 (1961) 『現代文章心理学』

林 雅子 (2002) 「動詞のテ形と連用形中止形の使い分けに関する実態調査——中級以上の作文・小論文指導のために——」『2002年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

益岡隆志 (1992) 『基本日本語文法』くろしお出版

_____ (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版

三上 章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版

南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

吉田妙子 (1996) 「言い替え前触れ」のテ形について」『日本語教育』91

吉永 尚 (1995) 「なかどめ形節分類についての考察」『日本語・日本文化研究』5

〈キーワード〉連用形接続法, 並列的, 句切りの力, 独立性, 連用形名詞化用法, イメージ化

The Nature of the Verbal *Renyo* Form

Toshiko SAWANISHI

The verbal *Renyo* form is independently used like an imperative one or a basic one. The main usage is the following two.

1. Conjunctive
2. Nominalization Usage

The feature of verbal *Renyo* form in a conjunctive is paratactic. The nominalization usage means that verbal *Renyo* form is individually used as noun. In this paper, I will consider the nature of the verbal *Renyo* form from the point of these two various usages and the following conclusion came out. The fundamental nature of the verbal *Renyo* is that it conceptualizes the meaning, which the verbal stem has, and pictures the images of it in our mind.